



森本あんり氏

- ⑦内田樹・編『日本の反知性主義』（今月刊）
- ⑧ロラン・バルトは、20世紀の仏の思想家。
- ⑨森本あんり『反知性主義 アメリカが生んだ「熱病」の正体』（今年2月刊）

「論壇時評」は毎月の最終木曜に掲載します。「あすを語る」は論壇委員が毎月交代で書きます。小熊さん以外の委員は、酒井啓子さん、菅原琢さん、濱野智史さん、平川秀幸さん、森達也さん。「担当記者が選ぶ 注目の論点」は委員会での討議を参考にしています。「論壇委員会から」は記者たちが交代で書く編集後記です。ネットからの紹介は執筆時点のもので、一定時間の経過後に読めなくなる場合があります。

る様々の社会矛盾は、決して消え去った訳ではない」「代思想」の特集(④)は、先た俳優、菅原文太。「仁義な主人公、広能昌三を演じた。19年、政治的活動に踏み出し、「知識人」とも見なされるよう農業を営みながら、ラジオやな現場で、夥しい人たちと、様について話しつづけた。

震災直後、わたしは『恋する小説を書いた。アダルトビたちがチャリティーAVを作不謹慎な(?)内容ゆえにされることは少なかつた。数なが、菅原からの対談の依頼だて最初の一声が、この小説は面白いが、難しいねてくれるかい?』だった。際して、菅原の特徴は、まず「と宣言することだ。

益子兜太への最初の一言。はまったくの門外漢でありましがら金子さんの俳句も……「憲法学者の樋口陽一には、早大法学部中退なんだけど、国憲法をよくよく読んだのはてなんだ(笑)」「(⑤)菅原は不勉強な人間だったの書店「東京堂」に勤めていた毎回、真剣勝負のようだった膨大な注文について書き、こらした(⑥)。

とはただの読書家ではない。「分のなかにつねに問題意識をて、本は読まれるが自分の確どが書いていなければ、そのない本なのだ」主義」のタイトルを掲げた本とされている。その中の一つ

で、内田樹は、こう書いている(⑦)。

「バルト(⑧)によれば、無知とは知識の欠如ではなく、知識に飽和されているせいで未知のものを受け容れることができなくなった状態を言う」

逆にいうなら、「知性」とは、未知のものを受け入れることが可能である状態のことだ。菅原のように、である。



森本あんりの『反知性主義 アメリカが生んだ「熱病」の正体』(⑨)は、「反知性主義」ということばの源流にまで遡り、その本来の意味を考えた。

「反知性主義には……単なる知性への反対というだけでなく、もう少し積極的な意味を含んでいる……知性そのものでなくそれに付随する『何か』への反対で、社会の不健全さよりもむしろ健全さを示す指標だったのである」

そして、森本は「知性と権力の固定的な結びつき」や「知的な特権階級が存在すること」に対する反感が、本来の「反知性主義」が意味するものだとした。

戦後そのものの映像化であるような「仁義なき戦い」だけではなく、多くの作品で、菅原は、歴史の決定的な瞬間に立ち合う役を演じているが、菅原が演じたのは、森本のいう「本来の反知性主義」者が多かったような気がする。

有名校の秀才から歩み始め、演技という現場から、身体で「知識」を吸収していった。「知識人」になった後の菅原と、俳優・菅原文太との間に齟齬が感じられなかったのは、彼が、演じることを通じて、自然に「知識」を、いや「知性」を身にまといていったからなのかもしれない。そのことは、実はひどく難しいことなのだった。